

人前化粧における意識

岡山大学大学院社会文化科学研究科

塩田 真友子

To makeup in public places has become common recently in Japan. In this study, the consciousness both the doer and the viewer of such behavior were investigated. In Study 1, the correlation between the behavior to makeup in public places or not several psychological scales were investigated. As a result, such behavior was significantly correlated with public self-consciousness, public other-consciousness, and the frequency of makeup in daily life. In short, those who are highly concerned with self and other's appearance, and those who makeup in daily life frequently tend to makeup in public places. Interestingly, Study 1 found that to value public manner and shame weren't correlated to such behavior. In Study 2, the difference of the viewer's consciousness by generation of the doer and by degree of makeup was investigated. As a consequence, participants rated more negatively to makeup heavily than lightly. And, participants rated more permissively to same generation than different generation. Within different generation, they rated more permissively to lower generation than to older generation. This study suggests that to makeup in public places isn't correlated with moral and shame. And consideration on the factor of youth will be needed.

1. 緒言

化粧とは、一般に女性にとって日常のかつ重要な行為である。村澤（2001）は、化粧を「ある集団＝社会がもつ美意識に基づいて顔やからだに意図的に手を加えて、外見的にも内面的にもそれまでの自分とは異なる自分になろうとするための行為」としている¹⁾。ここで言及されているように、化粧は対人的な作用だけではなく対自的作用をも持つ行為である。このことを示す研究はいくつかみられる（e.g. 松井・山本・岩男, 1983²⁾；岩男・菅原・松井, 1985³⁾；松井・岩男・菅原, 1985⁴⁾；菅原・岩男・松井, 1985⁵⁾；宇山・鈴木・互, 1990⁶⁾）。それらによると、化粧行動は「外見的評価の上昇」や「自己顕示欲求の充足」、「社会的役割への適合」（松井・山本・岩男, 1983）、「積極性上昇」（宇山・鈴木・互, 1990）といった対人的効果と、「自己愛撫の快感」や「変身願望の充足」等の「化粧行為自体がもつ満足感」（松井・山本・岩男, 1983）や「リラクゼーション」、「気分の高揚」（宇山・鈴木・互, 1990）といった対自的效果を有することが報告されている。松井・山本・岩男（1983）はそれら2つに加えて、「積極的な自己表現や対人行動」、「自信や自己充足感」といった心の健康に作用する要因を示している。

このように、化粧行動は主に対人的効果、対自的效果という2つの効用を有するとされている。岩男（1993）は、

化粧によって得られる満足感には化粧中に得られるものと化粧後に得られるものがあり、前者が対自的、後者が対人的なものであると述べている⁷⁾。対自的效果は私的空間において、対人的効果は公的空間において得られるものであると考えられる。化粧をする人にとっては、化粧前の顔、つまり素顔は私的なもの、化粧後の顔は公的なものと捉えられている。素顔から化粧後の顔へ変化することによって、変身願望の充足や気分の高揚などの対自的效果が得られる一方、化粧後の顔を他者に提示することによって自己顕示欲求の充足や積極性の上昇などの対人的効果が得られると考えることができる。菅原（2001）は、化粧が私的空間と公的空間を明確に区別し、両空間を往来する際のスイッチングの役割を果たしている⁸⁾。

しかし近年、この理論にあてはまらない行動が見られるようになった。電車やバスの中といった公的空間での化粧行動である。前述のように、本来化粧過程は私的空間において見られるものであったが、公的空間においてそれを露呈させるという行動が盛んに行なわれるようになった。この行動がマナー違反であると取り沙汰されるようになり、それに関する調査も行われるようになった。中央調査社（2001）が電車内のマナーに関する意識調査を行なったところ、電車内での化粧について調査対象者の66.0%が「腹立たしい」、「気になる」と回答していた⁹⁾。平松（2006）は、このような公衆場面での化粧行動の許容の構造を検討した結果、公衆場面での化粧行動の許容には、外的他者意識、公的自意識や私的自意識が影響することを見出した¹⁰⁾。

では、公衆場面における化粧行動の行為者の意識はどのようなものなのであろうか。これについて、心理学的に統制した調査を行った研究は少ない。そこで本研究では、大学生を対象として幾つかの心理尺度を用い、公衆場面での化粧行動を規定する要因を検討する（研究1）。具体的には、



Consciousness of makeup in public places.

Mayuko Shiota

Okayama University Graduate School of Humanities and Social Sciences

仮想的有能感（速水，2006）¹¹⁾，行動基準（菅原・永房・佐々木・藤澤・薊理，2006）¹²⁾，恥意識（永房，2000）¹³⁾，公的自意識（菅原，1984）¹⁴⁾，他者意識（辻，1993）¹⁵⁾，対人的志向性（斉藤・中村，1987）¹⁶⁾の6つの尺度を用いる。人前での行動には公共マナーを重視する規範意識や，それに違反した際に生じる恥意識なども関連すると考えられるため，行動基準（菅原他，2006），恥意識（永房，2000）を採用した。公的自意識（菅原，1984），他者意識（辻，1993）については先行研究を鑑み，さらに他者に対する関心を測定する対人志向性（斉藤・中村，1987）のうち，対人的関心・反応性尺度と個人主義傾向尺度を採用した。そして，社会的迷惑行為を行う者は自分に直接関係のない人間を軽視している（速水，2006）という可能性が考えられるため，仮想的有能感（速水，2006）を採用した。

2. 調査

2・1 研究1

2・1・1 方法

調査協力者 19歳～29歳 ($M=19.65$ 歳, $SD=1.30$)の大学生144名(女性130名, 男性14名)。

調査内容 質問紙は以下の内容で構成された。①仮想的有能感（速水，2006）11項目，②行動基準（菅原ほか，2006）5因子20項目，③恥意識（永房，2000）4因子17項目，④公的自意識（菅原，1984）11項目，⑤他者意識（辻，1993）2因子11項目，⑥対人志向性（斉藤・中村，1987）より対人的関心・反応性，個人主義傾向の2因子8項目，⑦化粧への興味・関心を尋ねる1項目，⑧流行への関心を尋ねる1項目，⑨公共の乗り物での化粧行動，⑩公共の乗り物での化粧を自分一人でもするのか，誰かと一緒にしなければならないのか，⑪普段の化粧頻度，⑫公共の乗り物での化粧行動についてどう思うか（自由記述）を尋ねた。①～⑧については，「1：全くあてはまらない」から「5：よくあてはまる」の5段階評定を求めた。⑨については，「よくする，たまにする，全くしない」，⑩については，「ほぼ毎日，たまに，めったにしない」の3段階で評定を求め，それぞれ頻度の高い方から3-1点を得点化した。

調査時期 2007年1月

手続き 個別記入式の質問紙により，大学の講義時間中に配布し，その場で回答を求め回答後回収した。回収率は72%であった。

2・1・2 結果

調査内容を考慮し，調査協力者のうち女性でかつ回答に不備のない113名を分析対象とした。

公衆場面における化粧行動の関連要因を検討するため，公共の乗り物での化粧と他の変数間の相関係数を算出した

表1 公共の乗り物での化粧行動と他の変数との相関係数

公共の乗り物での化粧行動	
化粧への興味・関心	.181
流行への関心	.152
仮想的有能感	.019
行動基準	
地域的セケン	-.101
仲間的セケン	.087
自分本位	.156
他者配慮	.075
公共利益	-.012
恥意識	.
自己内省	-.026
同調不全	.118
社会規律違反	-.038
視線感知	-.079
公的自己意識	.234*
他者意識	
内的他者意識	.080
外的他者意識	.190*
対人志向性	
対人的関心・反応性	.091
個人主義傾向	.008
普段の化粧頻度	.243**

* $n < .05$ ** $n < .01$

(表1)。その結果，公共の乗物での化粧行動と公的自己意識 ($r=.234, p<.05$)，外的他者意識 ($r=.190, p<.05$)，普段の化粧頻度 ($r=.243, p<.01$)との間に弱い正の相関が見られた。この結果より，公的自意識が高い，つまり自己の外見や言動に向ける注意が高い人，外的他者意識が高い，つまり他者の外見に対する関心が高い人，普段の化粧頻度が高い人ほど公衆場面において化粧行動をすることが示された。

しかし，本研究で設定した仮想的有能感や行動基準，恥意識と公共の乗物での化粧行動との相関は見られなかった。この結果より，大学生においては人前で化粧をすることと，公共マナーを重視することや恥ずかしいという意識，無条件に他者を軽視する意識とは関係がないということが示された。

2・2 研究2

研究1では，公衆場面での化粧行動の行為者の意識について検討したが，研究2においてはそのような行為の観察者の意識について検討する。平松（2006）は，当該行為の許容を規定する観察者の個人差要因を見出したが，本研究では行為者の属性に着目する。具体的には，行為者の世代，化粧の程度を設定した。行為者の世代については，調査対象者である大学生より下の世代である高校生，同世代である大学生，上の世代である30代の3条件を，程度については簡単な化粧直し，フルメイクの2条件を設定した。つまり，6場面を想定しそれぞれについて評定を求め，行為者の世代，化粧の程度による観察者の意識の差異を検討した。

2・2・1 方法

調査対象者 18歳～30歳 ($M=20.7$, $SD=1.64$) の大学生 146名 (女性 94名, 男性 50名, 2名については無記述であった)。

質問紙 質問紙は世代3 (下世代, 同世代, 上世代) × 化粧の程度2 (化粧直し, フルメイク) の6場面を想定したものである。実際の場面想定文は以下の通りである。

- ①「あなたが電車に乗っている時, あなたより年下である女子高校生が鏡を見ながら油とり紙を使ったり, リップを塗るといった簡単な化粧直しをしているのを目にしました。」②「あなたが電車に乗っている時, あなたより年下である女子高校生が鏡を見ながらアイメイクをし, 頬紅, 口紅を塗るといったフルメイクをしているのを目にしました。」③「あなたが電車に乗っている時, あなたと同世代の女子大学生が鏡を見ながら油とり紙を使ったり, リップを塗るといった簡単な化粧直しをしているのを目にしました。」④「あなたが電車に乗っている時, あなたと同世代の女子大学生が鏡を見ながらアイメイクをし, 頬紅, 口紅を塗るといったフルメイクをしているのを目にしました。」⑤「あなたが電車に乗っている時, あなたより年上である30歳前後の女性が鏡を見ながら油とり紙を使ったり, リップを塗るといった簡単な化粧直しをしているのを目にしました。」⑥「あなたが電車に乗っている時, あなたより年上である30歳前後の女性が鏡を見ながらアイメイクをし, 頬紅, 口紅を塗るといったフルメイクをしているのを目にしました。」これら6場面それぞれに関して, 「不愉快な気分になる」, 「よい感じがしない」, 「マナーが悪いと思う」, 「恥ずかしいことだと思う」, 「面白いと思う」, 「あまり気にしない」の6つの質問項目について「1:全くあてはまらない」から「5:よくあてはまる」の5段階評定を求め, それぞれ1-5点を得点化した。なお, この6つの質問項目

は, 研究1における「あなたは, あなた自身, あるいは他人が電車やバスの中などで化粧をすることについてどう思いますか」という質問に対する自由記述での回答をKJ法により分類し, 作成したものである。

最後に, 自分自身は電車の中のような公衆場で化粧をするかしないか (女性に対してのみ回答を求めた), 性別, 学年, 年齢, 出身都道府県を尋ねた。

調査時期 2007年6月～7月。

手続き 質問紙1枚につき, 1場面とそれに対する6つの質問項目を記載した。場面の順序による効果を相殺するため, 6場面の順序は1部ごとにランダムとした。個別記入式の質問紙により, 大学の講義時間中に配布し, その場で回答を求め, 回答後回収した。回収率は88.6%であった。

2・2・2 結果

調査内容を考慮し, 調査対象者のうち年齢が25歳以下であり, かつ回答に不備のない139名 (女性90名, 男性49名) を分析対象とした。

行為者の世代, 化粧の程度による観察者の意識の差異を見るため, 6つの質問項目それぞれの得点について, 世代3 (下世代, 同世代, 上世代) × 化粧の程度2 (化粧直し, フルメイク) の2要因実験参加者内分散分析を行った (表2)。その結果, 「面白いと思う」を除く全ての質問項目について世代の主効果が有意であった。また, 全ての質問項目について化粧の程度の主効果が有意であった。このうち, 交互作用が得られたのは「よい感じがしない」, 「あまり気にしない」の2つの項目であった。

これらの2つの質問項目について, 交互作用が認められたので, 単純主効果検定を行なった。まず, 「よい感じがしない」について, 全ての化粧の程度における世代の単純主効果が有意であった (化粧直し: $F(2, 552) = 14.55$,

表2 各質問に対する行為者の世代・化粧の程度別の平均得点 (SD)

	化粧直し			フルメイク			F (df)		
	下世代	同世代	上世代	下世代	同世代	上世代	世代	化粧の程度	交互作用
不愉快	2.48 (1.13)	2.33 (1.10)	2.75 (1.14)	3.64 (1.16)	3.4 (1.20)	3.73 (1.17)	18.87** (2, 276)	202.07** (1, 138)	1.93 (2, 276)
よい感じがしない	2.77 (1.20)	2.72 (1.25)	3.07 (1.23)	4.07 (1.05)	3.89 (1.14)	4.15 (1.02)	14.88** (2, 276)	188.94** (1, 138)	3.34* (2, 276)
マナーが悪い	2.81 (1.22)	2.71 (1.17)	3.06 (1.23)	4.17 (0.92)	4.00 (1.00)	4.22 (0.95)	15.62** (2, 276)	185.04** (1, 138)	2.42 (2, 276)
恥ずかしい	2.60 (1.21)	2.58 (1.16)	3.00 (1.22)	3.96 (0.97)	3.89 (1.06)	4.23 (0.90)	27.10** (2, 276)	214.96** (1, 138)	1.08 (2, 276)
面白い	1.79 (0.93)	1.75 (0.98)	1.92 (1.14)	2.39 (1.32)	2.22 (1.22)	2.32 (1.35)	2.64 (2, 276)	51.85** (1, 138)	2.16 (2, 276)
気にしない	3.51 (1.19)	3.71 (1.24)	3.20 (1.27)	2.32 (1.21)	2.42 (1.19)	2.18 (1.11)	16.48** (2, 276)	174.58** (1, 138)	3.69* (2, 276)

* $p < .05$ ** $p < .01$

$p < .01$, フルメイク: $F(2, 552) = 7.27, p < .01$)。5%水準のライアン法 ($Mse = .33$) による多重比較の結果, 化粧直し条件において, 同世代 (2.72 ($SD = 1.25$)), 下世代 (2.77 ($SD = 1.20$)) < 上世代 (3.07 ($SD = 1.23$)) となり, フルメイク条件においては同世代 (3.89 ($SD = 1.14$)) < 下世代 (4.07 ($SD = 1.05$)), 上世代 (4.15 ($SD = 1.02$)) となった。この結果より, 化粧直し条件においては行為者が同世代である場合と下世代である場合に評価の違いは無く, 上世代に対しては否定的な評価をしているが, フルメイク条件においては行為者が自分と同世代である場合に最も寛容な評価をしていることが示された。また, 全ての世代における化粧の程度の単純主効果が有意であり (下世代: $F(1, 414) = 174.28, p < .01$, 同世代: $F(1, 414) = 142.91, p < .01$, 上世代: $F(1, 414) = 122.64, p < .01$), いずれの世代においても化粧直し条件よりもフルメイク条件の方が有意に得点が高かった。すなわち, 行為者の世代に関わらず, 化粧直しよりもフルメイクのほうがより否定的に評価されていることが明らかとなった。

次に, 「あまり気にしない」について, 全ての化粧の程度における世代の単純主効果が有意であった (化粧直し: $F(2, 552) = 19.28, p < .01$, フルメイク: $F(2, 552) = 4.24, p < .05$)。5%水準のライアン法 ($Mse = .47$) による多重比較の結果, 化粧直し条件において, 上世代 (3.02 ($SD = 1.27$)) < 下世代 (3.51 ($SD = 1.19$)) < 同世代 (3.71 ($SD = 1.24$)) となり, フルメイク条件においては上世代 (2.18 ($SD = 1.11$)) < 同世代 (2.42 ($SD = 1.19$)) となった。この結果は, 化粧直し条件では行為者が自分と同世代である場合はあまり気にならないが, 異なる世代である場合は気になるということを示している。フルメイク条件においても, 自分と同世代または下世代が行なっているよりも, 上世代の方が気になるということを示唆している。また, 全ての世代における化粧の程度の単純主効果が有意であり (下世代: $F(1, 414) = 128.40, p < .01$, 同世代: $F(1, 414) = 149.30, p < .01$, 上世代: $F(1, 414) = 93.96, p < .01$), いずれの世代においても化粧直し条件よりもフルメイク条件の方が有意に得点が低かった。すなわち, 行為者の世代に関わらず, 化粧直しよりもフルメイクを行なっているのを見た時の方がより気になるということが明らかとなった。

化粧の程度については, 一貫して化粧直しよりもフルメイクの方が否定的に評価されていた。世代については, 自分と異なる世代よりも同世代の行為者に対して評価が寛容であること, 自分と異なる世代においては, 下世代よりも上世代に対してより否定的な評価がなされるという傾向が見られた。

3. 考察

本研究では, 電車の中という公衆場面における化粧行動に関する大学生の意識を明らかにすることを目的とした調査を行った。研究1では, 公衆場面での化粧行動を規定する要因を検討し, 研究2ではそのような行動を目撃した観察者の意識について検討した。研究1の結果より, 自己の外見や言動に向ける注意が高い人, 他者の外見に対する関心が高い人, 普段の化粧頻度が高い人ほど公衆場面において化粧行動をするが, 公共マナーを重視することや恥ずかしいという意識, 無条件に他者を軽視する意識は人前での化粧行動を決定づける要因であるとは言えないということが示された。研究2では, 公衆場面において他者の化粧行動を目撃した際, その化粧の程度が軽い場合 (化粧直し) よりも重い場合 (フルメイク) の方が否定的評価が強いこと, またその行為者が自分と同世代の人物である場合の方が異なる世代の人物である場合よりも寛容な評価を下し, さらに, 異なる世代である場合, 自分より下の世代の人物よりも上の世代の人物に対してより否定的な評価を下すことが示された。

化粧の程度が軽い方が許容度が高いという結果に関しては, 平松 (2006) の知見と一致する。行為者の世代に関してであるが, 菅原 (2005) によると, “若者たちが恥ずかしいと感じるのは, “若者らしくない姿や行動”である”という。電車の中で化粧をするという行動が “若者らしい行動” と捉えられているならば, 本研究の結果は妥当であると考えることができる。すなわち “若者らしい行動” をするべきではないと感じた上世代の行為者に否定的な評価を下したと考えられる。研究1についても, 行為者にとっては当該の行動は “若者らしい行動” であるため恥ずかしいとは感じなかったと考えることができる。

菅原 (2005), 澤口・南 (2004)¹⁷⁾ は, 現代人はセケン・仲間と認識する範囲が狭いこと, その中のメンバーからの評価は非常に気にするが, それ以外の人間からはどのように評価されるかは気にしないことなどを主張している。故に, 電車の中といった公共の場に居合わせる人々に関心がないため, 化粧や地面に座り込むなどの行動をするのだと述べている。本研究では, 調査対象者に観察者としての評価を求めたが, 自分が行為者であると想定し他者からどのような評価を受けるかについての回答を求めるといった調査を行えば, そのような主張について心理学的に検証することが可能であろう。

謝辞

本研究を助成いただいたコスメトロジー研究振興財団に厚く御礼申し上げます。

また, 本研究における調査にご協力いただいた就実大学

原奈津子先生，松山東雲大学林幹也先生，岡山大学東條光彦先生，長谷川芳典先生，堀内孝先生に深く感謝いたします。

(引用文献)

- 1) 村澤博人，：化粧の文化誌，大坊郁夫編，：化粧行動の社会心理学，北大路書房，京都，2001，48-63頁。
- 2) 松井豊・山本真理子・岩男寿美子，：化粧の心理的効用，マーケティング・リサーチ，21，30-41，1983。
- 3) 岩男寿美子・菅原健介・松井豊，：化粧の心理的効用(Ⅳ)－化粧行動と化粧意識－，日本社会心理学会第26回大会発表論文集，102-103，1985。
- 4) 松井豊・岩男寿美子・菅原健介，：化粧の心理的効用(Ⅳ)－生きがい・充実感との関係から－，日本社会心理学会第26回大会発表論文集，104-105，1985。
- 5) 菅原健介・岩男寿美子・松井豊，：化粧の心理的効用(Ⅳ)－自己呈示としての化粧行動－，日本社会心理学会第26回大会発表論文集，106-107，1985。
- 6) 宇山侑男・鈴木ゆかり・互惠子，：メーキャップの心理的有効性，日本化粧品科学会誌，14，163-168，1990。
- 7) 岩男寿美子，：化粧する理由に関する一考察，資生堂ビューティーサイエンス研究所編，：化粧心理学 化粧と心のサイエンス，フレグランスジャーナル社，東京，1993，264-267頁。
- 8) 菅原健介，：化粧による自己表現，大坊郁夫編，：化粧行動の社会心理学，北大路書房，京都，2001，102-113頁。
- 9) 中央調査社，：車内マナーに関する意識調査，中央調査報，522，1-3，2001。
- 10) 平松隆円，：化粧行動許容に関わる公衆場面の構造解明とそれを規定する個人差要因，繊維製品消費科学，47，12-21，2006。
- 11) 速水敏彦，：他人を見下す若者たち，講談社，東京，2006，133頁。
- 12) 菅原健介・永房典之・佐々木淳ほか2名，：青少年の迷惑行為と羞恥心－公共場面における5つの行動基準との関連性－，聖心女子大学論叢，107，57-77，2006。
- 13) 永房典之，：日本の若者における恥意識の特徴－道徳性と自己意識からの検討－，東洋大学大学院紀要，37，17-38，2000。
- 14) 菅原健介，：自意識尺度 (self-consciousness) 日本語版作成の試み，心理学研究，55，184-188，1984。
- 15) 辻平治郎，：自己意識と他者意識，北大路書房，東京，1993。
- 16) 齊藤和志・中村雅彦，：対人的志向性尺度作成の試み，名古屋大学教育学部紀要 (教育心理学科)，34，91-109，1987。
- 17) 澤口俊之・南伸坊，：平然と車内で化粧する脳，扶桑社，2004。